

子どもたちに多彩な表現手段を 絵や俳句作りを通して表現の幅を広げる

横浜市立大口台小学校 佐藤幸江教諭

<プロジェクト以前>

横浜市立大口台小学校に赴任する前、中川西小学校に勤務していました。そこで、中川一史先生（現・金沢大学助教授）に出会いました。当時私はコンピュータを使うことができませんでしたが、中川先生は、教室や廊下にコンピュータを置いて、子どもたちに自由に使用するというスタイルでIT活用をされていました。その頃、私は横浜国立大学に内地留学をする機会を得て、空き時間に中川先生の授業を拝見することができ、徐々にその面白さを感じるようになりました。

その後、中川西小学校に戻ってから、中川先生のクラスなどと連携しながら、自分でも実践を行うようになりました。

実践の経過、教訓

メディアキッズがベースに

私自身は、中川先生の影響もあり、メディアキッズ(インターネットを活用した学校間交流プロジェクト)に参加し、そこで鍛えられました。また、大口台小学校は赴任当時、神奈川県視聴覚の研究指定校であり、校長先生がその会長を務められていたこともあって、管理職の理解を得ることができ、先進的な実践を進めることができました。



財団法人コンピュータ教育開発センター(CEC)のEスクエア・プロジェクトで行った「インターネットで絵のリレーをしよう!～連画～」(平成11年度)は、アーティストの安齋利洋さん、中村理恵子さんに外部講師として参加頂いたプロジェクトです。コンピュータを利用しても、道具が変わっただけで、子どもたちが「表現する」という点では同じです。筆やペンがマウスに変わっただけで、違和感なく取り組みました。むしろ、今まで絵の具ではなかなか描けなかった子どもが、試行錯誤が容易にできるという安心感からマウスを持つと描けるようになりました。表現ツールが増えることは良いことだと実感しています。アーティストの方も良い方で、「スクール版連画」はバージョンアップしながら今でも続いています。

「俳句プロジェクト～俳句作りを通して、地域の四季の移り変わり・人とのかわりなどに目をむけよう～」(13年度)を始めたのは、今の子どもたちは日常の四季について鋭敏な感覚を持っていないと感じたのがきっかけです。日常の中に潜む、日本の素敵な四季の移り変わりを感じとってほしいと、俳句を取り上げました。

こうしたEスクエア・プロジェクトでの実践はメディアキッズでの人との出会いや実践がベースになっています。

「インターネットで絵のリレーをしよう!～連画～」

安齋利洋氏・中村理恵子氏が提唱する「コンピュータグラフィックスによる絵画作品をインターネットを使って相手に送り、そのデータを加工修正することで新しい絵画作品を生み出していく手法」を適用したもの。

子どもたちがコンピュータや手で描いた絵を、電子掲示板に展示。その絵をイメージの種に、他の子どもが絵を続けていったり、絵の感想を書いていったりする。

<http://www.cec.or.jp/es/E-square/books/11nendo/gakko/056/056.html>

俳句プロジェクト

身近な生活の中で感じたことなどを俳句にし、電子掲示板に発表。友達の作った俳句を読み合ったり、他校の人から意見をもらったりして、コミュニケーションを深める。

<http://www.cec.or.jp/00e2/books/H13/resume/F/F4.pdf>

表現の幅が広がる

連画プロジェクトの効果については先に述べましたが、俳句プロジェクトは、季語が重複する、季語がなくて川柳になっている、など俳句の形になっていないといった問題はありませんでしたが、子どもたちが季節など日常の中の小さなことに感覚を働かせるようになり、表現の幅が広がりました。

この2つのプロジェクトに共通するのは、「表現」です。子どもたちは個性的な存在で、その表現手段もいろいろあっていいと思います。ですから、子どもたちに様々な表現手段に出会う場を提供してあげられたらと思っています。そして、その中のどれか1つの表現手段がフィットして、うまく自分を表現してくれるといいなと思います。



交流校の宮が瀬小「作品展」に出展してもらった「俳画」

また、子どもたちは近くの横浜市立盲学校の生徒と交流して「えー小学生でもこんな俳句が作れるの」と声をかけてもらったことで、自信ができました。連画プロジェクトでも、アーティストの方に認めてもらえると、子どもたちにとって大きな励みになりました。

市内での活用の広がりが課題

課題について最も大きいことは、横浜市は学校数が多く、なかなか機材が整わない状況があります。従って、「こんなことができた」、「子どもたちがこう変わった」と発表しても、機材がないから自校ではできないで終わってしまう。横浜市の中になかなか広がっていかない、という問題があります。

10年間を振り返って

「子どもの表現に効果的」がICT活用の原動力

私がICTを活用した教育を続けているのは、次の3点になると思います。

第1は、「子どもの表現」という面で、ICTが効果的だから続けているのだと思います。また、子どもたちにそのような表現の広がりができれば、人とのつながりも広がっていくのだと思います。

第2は、研究会などでの経験です。私自身は当初、研究会などでは「溜め込むが、出さない」方でした。あまり発言もしませんでした。しかし、様々なプロジェクトに参加していると、「言わなければ損」、少しでも腑に落ちないことがあれば、「出そう」という気持ちになってきました。そうすることで、他の人が「私もそう思うよ」と言ってくると、子どもたちと同じで、「良かった。また今度も考えて言おう」という気持ちになります。

第3は、研究仲間の存在です。中川一史先生の影響がとても大きく、中川西小学校のころから現在まで、ずっと叱咤激励していただいています。

<成功の秘訣>

プロジェクトを成功させるため、私が重要だと考えていることをいくつか上げさせていただきます。

人とのつながりを大切に

プロジェクトを行うのは、自分一人の力ではできません。1つのプロジェクトを行ったときにできた人とのつながりを大切に、次のプロジェクトへとつなげていけるようにしています。

そのためにも、自分のお金で外部の研究会に参加しています。他県でいい実践をし、また意欲的にいい授業をしたいと研鑽しておられる先生方から刺激を受け、視野を広げ、そういう方々とつながることが大事だと思っています。

他の先生を引きつけるアイデア

アイデアが大切だと思います。他の先生方が「あっ面白いことをやっているな」と思ってくれることが大切で、先生自身がおもしろいと思うことをすることが、継続の秘訣の1つだと思っています。

公開授業を進んで行う

大口台小学校もネットデイにより校内LANを整備しましたが、初期の頃の利用者は私一人でした。その後先生方が入れ替わり、また私自身も公開授業を行う際には、必ず他の先生方にも指導案を配り、「見に来てください」と言ってきました。その結果、段々理解してもらえるようになりました。